

埼玉県

図書館だより

第 2 号

昭和54年 9 月 30 日

編集 埼玉県立図書館
広報委員会

発行 埼玉県立浦和図書館
館長 石川 正明
浦和市 高砂 3-1-22

も く じ

- 図書館間貸出と「協力車」
利用者の声……………(2) (3)
- 浦和図書館・おしらせ
清水美江コレクション紹介 (4)
- 熊谷図書館・おしらせ
秩父札所関係資料……………(5)
- 川越図書館・おしらせ
細川紙資料展案内……………(6)
- 県内図書館めぐり(飯能)
図書館の周辺……………(7)
- 本のひろば(出版情報資料)
おたずねください……………(8)

………題字は高橋庄次郎氏

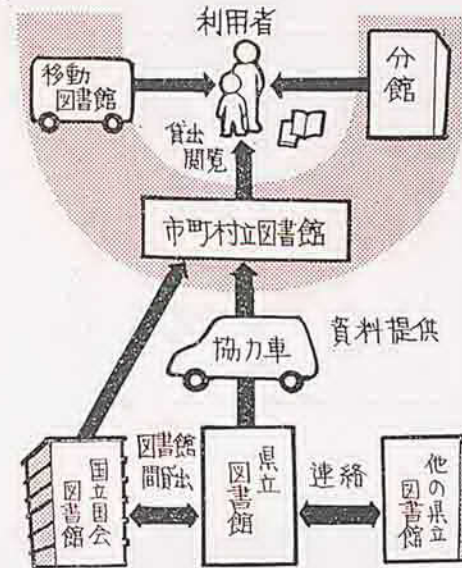


打木村治作「天の園」の舞台、東松山市下唐子の風景



他館の図書も利用できます

図書館間貸出と「協力車」の意義



「協力車」、図書館間で貸し借りされる本を運ぶ車を図書館ではこう呼んでいます。ここでは県立図書館の図書館間貸出と協力車の意義・役割などをご紹介します。

求められた資料を提供するために

いま埼玉県立各図書館では、利用者に求められた図書(資料)が自館にない場合、市販のものについては購入し、非売品等は寄贈を受けるなどして収集し提供しています。さらに自館で入手できないときには他の県立図書館や国会図書館等から図書館間の貸出を受けて提供することになります。同様のサービスは県内の市町村立図書館の多くが行っています。

住民が調査・研究・趣味・娯楽等生活のあらゆる場で必要とする資料

を収集・整理・保存し、提供することは公共図書館の基本的な責務とされています。そのためにそれぞれの図書館では、利用者から求められた資料は、草の根を分けても探し出して「提供しよう」と努めています。しかし住民の多種多様な資料要求のすべてにこたえることは、個々の図書館の力だけでは不可能なことです。そこで、資料を図書館間で貸し借りする相互貸借制度を軸とした、図書館相互協力体制を確立することが現在の図書館界の大きな課題の一つとなっています。とりわけ市町村立図書館のサービスを支え補うことを主要な機能とする県立図書館には重要な役割が課せられています。

図書館間貸出と「協力車」の役割

ここ数年、県内の市町村立図書館のサービスは著しく前進してきました。貸出を中心とした利用の増加に伴い、住民の資料要求は質量ともに拡大してきました。それぞれの図書館では、図書の予約・リクエスト制度を行うなどして利用者の要求を把握し、資料を増加・充実させてこれに応えようとしています。

このような状況の下で、県立図書館

館に対して、市町村立図書館が所蔵しない資料や収集できない資料を求めにに応じて各図書館に貸し出す図書館間貸出を行い、その資料を搬送するための「協力車」を運行することを望む声が強まってきました。こうした声に応え、各県立図書館は図書館間貸出と「協力車」の先導的試行としてのサービスを開始しました。浦和図書館では、昭和48年4月から川口・与野等の四市立図書館を対象に連絡業務を中心とした巡回を開始しました。その後対象館を徐々に拡大し、巡回頻度も増やして今年9月からは4コース24館を月2回の割合で巡回することになりました。熊谷図書館では山びこ図書館の配本を兼ねながら市町村立図書館を月に1回、県立図書館間を月に1回巡回しています。また川越図書館では昭和52年4月から県立の移動図書館の行かない所沢等の4市立図書館を対象に月2回、県立図書館間を月1回巡回しており、県立の3館がこれらの「協力車」によってほかの図書館に貸出した資料の総冊数は昭和53年度で約4千冊にのぼりました。「協力車」はこの図書館間貸出資料の搬送を主に寄贈交換資料の配布や、配本所への図書の配本等を行っています。

県立図書館としての機能強化をめざして

機能強化をめざして

生涯学習を資料面から保障する図書館への地域住民の大きな期待に支えられて、市町村立図書館のサービスは一層発展していくことでしょう。それにとともに、県立図書館は「図書館の図書館」としての役割、相互協力センターとしての機能をより強化することが求められることにな

ると考えられます。その点からみると、現行の市町村立図書館等への図書館間貸出と「協力車」業務は、まだ緒に付いたばかりで、これから残された課題が少なくありません。まず、これまでの試行過程の中で得られたデータを基に、「協力車」業務の本格的な推進を図るための諸条件の確立が急がれます。より早く資料を届けるための巡回頻度の増加等もその中で考えていく必要があります。

まず、次に求められた資料を確実に提供するために県立図書館の資料を充実させていかなければなりません。さらに図書館間貸出の際に資料の所在等をさがすための蔵書目録をはじめ各種目録の刊行も強く望まれています。今後、県立各図書館の緊密な連携のもとで、これらの課題の解決をはかる必要があると考えられます。

便利な図書館間貸出

鴻巣市 須永美津枝

協力車業務の充実に期待

北本市立図書館には、二週間に一度県立浦和図書館の協力車が巡回してきます。この協力車による資料提供は、当館のような蔵書一万四千冊・資料費五百万円・職員数四名(含臨時・非常勤)の小さな図書館では、とくに力強い活動上の支えとなっています。

私達の館では、市民のさまざまな読書要求に応じるためにリクエスト制度を採用し、求められた図書は最大限提供する努力をしています。図書館にないもので、市立図書館として当然備えるべき図書

は原則として購入することにしてあります。しかし多種多様なリクエストにすべて自館だけで応えることは勿論不可能です。すでに絶版等で購入できない資料、市販されていない資料、価格の高い資料や内容が高度に専門的利用頻度などから市立図書館があて所蔵する必要がない資料、注文以後入手までに一ヶ月以上かかるもの等は協力車に頼ることにしています。先日もある利用者が読みたい図書が当館にはなく、ちょうど翌日が協力車の巡回日でしたので、早

速県立図書館に連絡をして、つぎの日の午後には貸出すことができました。このように、利用者にとっての本が「ありますか」と尋ねられて、所蔵していない時に「協力車で他の館から借りて持ってきてもらいます」と答えられ、利用者の期待に応えることのできるシステムがあることは、私達図書館職員にとっては心強いかがりです。今後、この協力車の運営の体制が確立され、巡回頻度や提供のための資料も充実し、相互協力のための書誌等の整備も進められることを期待しています。

北本市立図書館 司書 芳野悦青

私は、日本の通信教育生です。今卒業論文を書いている最中です。この論文を作成する為、資料を捜しに熊谷図書館に行ったのですが、必要としている図書は見つかりませんでした。受付の人に尋ねてみると係員が目録カードで調べてくれました。そして「当図書館にはありませんが、浦和の県立図書館にこの図書はございます」と丁寧に答えてくれました。私は他の図書館にある本も利用できるということを知りました。「史窓」12号に掲載されている「地頭源流考」はぜひ読みたい本だったので、この雑誌は国会図書館にあり貸し出しはできないということでしたが、係員の親切によってコピーをしてもらうことができました。他の図書館の本や、国会図書館のような所にはない専門的な本まで、近くの図書館に申込するだけで、バスや電車を使って遠い所まで借りいなくても、利用することができなんてほんとうによいことだと思えます。そしてこのようなシステムをもっと広げていてもらいたいと思います。

浦和

庶民感情を最もよく表現する文芸である川柳を作る人の数は、現在全国で数百種も発行されている川柳雑誌、あるいは一般紙誌の川柳欄から見ると、相当多いと思われる。にもかかわらず、各地で発行されている川柳雑誌や個人集が一般の人の目に触れる機会はいずれも少ない。

珍しい川柳雑誌が五百種

清水美江コレクション紹介

清水美江氏のこと 美江さんは児玉郡賀美村の生れ、大正十年に埼玉県土木技手となられましたが、川柳を始めたのはそれより前の大正七年のこと、以来六十年以上もこの道一筋に生きて埼玉の川柳界の草分け的存在でした。昭和三十三年には、現在の川柳雑誌「さいたま」の前身「あだち」を創刊し、各地で句会を催すなどの活動をしながらかつて、読売新聞埼玉版時事川柳の選者として、また四十五年には川柳教室を開くなどして川柳人口の底辺拡大と普及に努められた浦和市の川柳作家清水美江さん(本名・策治)が生前、収集された川柳関係の雑誌、図書を中心とした資料を寄贈していただいたので、このコレクションについて紹介したいと思います。

作句力の方でした。そのコレクション 寄贈された資料は約六百種、一万五千点余、その内の九割は川柳に関するもの、残り一割が農業土木関係その他、となっています。

川柳雑誌は約五百種、それらを発行している吟社を見ますと、北海道から九州と全国にわたり、海外のものもあります。発行地の多彩さばかりでなく、近代川柳の流れの中で重要なものも少なくありません。その一つが「大正川柳」です。古川柳を見なおそう、という明治三十年頃から始まった川柳改革運動の一方の



(収集された川柳誌など)

流れである柳亭寺川柳会が大正期に入って創刊したもので、ここから有能な若手作家が続出して、大正時代の川柳界の主流をなしたものです。又、大正・昭和にかけて全国川柳界の指導的存在だった六人の主宰する吟社の川柳雑誌「川上三太郎の「川柳研究」、村田周魚の「川柳きやり」、前田雀郎の「せんりう」、岸本水府の「川柳番傘」、麻生路郎の「川柳雑誌」、福元紋太の「ふあうすと」などもあります。(なお、十月二十七日から十一月七日まで、当館一階ホールで、このコレクションの展示会を催します。)



児童奉仕研究会

1階ホール

11月・12月の各第3木曜「はじめの詩」他 講師 本田和子氏 午後1時30分

おはなし会

1階鑑賞室

毎月第1・4土曜 10歳以下の子どもを対象に 午後3時

映画会・コンサート 1階鑑賞室

第3水曜アニメーション映画会

11月21日・リスのバナシ他 12月19日・森のいえ他 午後2時30分

第2土曜映画会

11月10日・絵図に偲ぶ江戸のくらし他 午後1時30分

第3土曜レコード・コンサート

11月17日・アメリカン・ブラック・ミュージック 12月15日・パツハの宗教音楽 午後2時

『読書週間の諸行事』 於埼玉会館 ◆本を読む県民のついでい 講演・杉本苑子氏「戦国女房の条件」 パネルディスプレイ「子ども読書の考える」 ひとり芝居「絵のない絵本」五十田安希氏 11月1日午前10時 ◆ロック・スペシャル・レコードコンサート 10月25日午後5時30分

熊谷

資料に見る秩父の札所

「秩父順拝記」「秩父幻想行」

秩父路に梅の花の咲く頃になると鈴の音をひびかせて札所めぐりが始まります。この秩父札所めぐりはいつ頃から始まったものでしょうか。

秩父札所の成立については、平安期とするもの(秩父三十四所観音霊驗門通伝)や江戸時代初期とするもの(吉田東伍『大日本地名辞書』)など諸説がありますが、今日では納経札に残る年代などから室町時代に成立したとみるのが定説になっているようです。まず最初に西国札所が平安時代に成立し、次に鎌倉時代に坂東札所、最後に秩父札所が出来たとされています。

この秩父札所に関しては江戸時代からいろいろな研究書が書かれていますが、この頃のものとしては正徳版『秩父順拝之縁起』(県立浦和図書館蔵)や円宗(建部涼袋の別名)の著した『秩父三十四所観音霊驗門通伝』(秩父市立図書館蔵)があります。とくに江戸の文人、竹村立義の『秩父順拝記』(文政六年刊。県立浦和図書館蔵)は当時の巡礼の様子と共に庶民の生活がよく描写されていて、興味あるものです。

また案内記・霊驗記では、まず『秩父観音霊驗記』(服部応賀編。県立浦和図書館蔵・秩父市立図書館蔵)があります。安藤広重、歌川国貞が絵



(札所関係資料の一部)

を描き、服部(万亭)応賀が文を書いた寺ごとに一枚のものとした三十四枚の錦絵で、かわった縁起となっています。ほかに『秩父道中記』(文化七年刊)『秩父札所順礼神社仏閣古蹟独ハひとり案内』(江戸末期)『秩父独案内』(橋本徳版画。文化

十年刊)などがあります。

明治以降も数多くの研究書・案内書が出されていますが、最近のものからいくつあげてみますと、『秩父札所の成り立ち』(四方田稔)など七編の論文からなる『秩父札所の今昔』は今までの研究成果をわかりやすくまとめたもので札所について概観するために役立ちます。特に矢島浩の『秩父観音霊場研究序説』をはじめとするいくつもの著作は専門書として貴重なものといえます。

また清水武甲撮影の写真文集『秩父幻想行』は秩父観音霊場をテーマに、その心と風土をさぐるものとして、著者長年の写真のなかから九十枚が収録され、心安らぐ作品となっています。

(なお十一月九日(金)から十一月十八日(日)まで当館で秩父札所資料展を開催します)

おしらせ

「県民の日」を中心に

◇郷土を知る文化資料展(秩父札所・別掲)

◇郷土を知る文化講演会 於熊谷福祉センター(当館隣)

11月10日(土)午後2時 講師 日下部

朝一郎氏
◇郷土埼玉映画会 鑑賞室 午後12時15分

◇11月9日(金)「巡礼」カラー30分 「鉄剣は語る」カラー30分

◇11月22日(木)「秩父夜祭」カラー30分 「ふるさとの秋」

◇埼玉を知る映画会 11月14日

(水)県民の日 午前10時・午後2時
時「埼玉百年」カラー61分

名作映画鑑賞会 鑑賞室 午後1時30分 10月20日(土)「アラスカ物語」 11月17日(土)

「三婆」
母親教養講座 於熊谷市民ホール

11月12日(月)午前10時・12時

「子どもの本をめぐって」 講師 中野みち子氏

クリスマス子ども読書会 鑑賞室

12月22日(土)午後2時・4時
映画とおはなしとクイズ

名曲鑑賞会 鑑賞室 12月25日
(火)12時15分 1 クリスマス
特集 解説・引野美美子氏

川越

細川紙(小川)の歴史をたどる
11月下旬に資料展開催

小川町や東秩父村は、手漉和紙「細川紙」のふるさととして、よく知られています。この地域の和紙の歴史は古く、一説には、その起源は千数百年の昔にさかのぼると言われています。また、記録によると江戸時代には七百軒を超える手漉業者があったといわれ、盛んであった当時の紙漉の様子がかがえまします。

文化・文政の頃、都幾川村の慈光寺に参拝した江戸の国学者清水浜臣が、その折の日記『都伎山日記』の中に、

「この村上下と分かれて広し。皆いさら川にそいたる家々にて、その流れに別にちいさきわら屋根をむすびて、紙すくわざをなりわいとす。紙きめたのおと、おちこちにきこえておかし。

秋ならできくもめずらし山川に紙うつおとのつれて落ちくる」と記しているのを見ても、当時のありさまが目に浮かび、むかしの紙漉の賑わいが偲ばれます。

ところが、時代が降るにつれて、



(戦前の紙漉風景・「工芸」59号より)

この手漉和紙は洋紙の普及や生活様式の変化などによって衰退の一途をたどり、今はこの業者は僅かに二十数戸となってしまいました。しかし和紙そのものの持つ伝統的な美しさに、日本人の心のふるさとを見出し評価する声は高く、昭和五十三年に細川紙の技術保持者が国の重要無形文化財に指定され、器具収蔵庫も新設されるなど、この伝統和紙の優雅

な美しさを見直そうという気運も高まってきています。

このような伝統的文化を再認識する動きは、ここ数年県民の間にも広がり、郷土の歴史をさぐり、伝統産業の意義を見直し、ふるさとの文化に親しもうとする人びとも多くなってきました。

県立図書館でも、このような県民の動きに応じて図書館の資料を中心とした展示会や集会活動などの「文化事業」をより一層充実していくことを計画しています。

郷土文化を知る資料展 集会室

◇郷土の人物資料展 11月6日

(火)より14日(水)まで 1県

西部ゆかりの人物に関する図書資料等を展示します

◇細川紙資料展 11月

21日(水)より29日(木)

まで(内容別掲)

映画会 鑑賞室

ふるさと埼玉を知る映画会

10月24日(水)午後2時

後2時「ふるさとの秋」他3本

○優秀映画鑑賞会

10月20日(土)「羅生門」11月

10日(土) 12月1日(土)

その一つとして、川越図書館では埼玉県立図書館を図書館資料からたどるという展示会を企画し、その第一回に細川紙をとりあげることにしました。この資料展は細川紙についてこれまで発表・刊行された文献などを中心としてその歴史をたどろうとするものです。

(「図書資料からたどる細川紙の歩み展」は十一月二十一日から二十九日まで当館集会室で開催いたします。)

○読書週間映画会

11月1日・2日 午後2時

○冬休み親子映画会

12月下旬 午前10時・午後2時の2回

移動図書館利用者のつどい

○比企地区移動図書館利用者のつどい(研究発表・講演) 10月12日(金)

午前10時 比企郡滑川村 松寿荘

○人間地区移動図書館利用者のつどい 11月中旬の予定

なお、このつどいについての詳細は当館移動奉仕課にお尋ね下さい

＝すべての市民の利用をめざして＝

県内図書館めぐり

飯能市立図書館

西武線飯能駅から徒歩約十五分・国鉄東飯能駅から徒歩約二十分の市街地西部に位置する飯能市立図書館は、読書室の窓から入間川の清流や緑の木立を眼下に眺めることができますし、あおげば緑の峰のかたには秩父や奥多摩の山々が望まれて、四季折折にその風景を楽しむことができますという恵まれた環境のなかにあります。

この図書館は昭和二十七年二月飯能町立図書館として発足し、その後数度の移転を経て、昭和四十九年二月現在地(旧市庁舎跡)に、鉄筋コンクリート造り地上二階・地下一階・延面積九一八平方メートルの規模で竣工したもので、飯能

市中央公民館と隣接しています。館内は一階が子ども室・談話室・事務室・整理室があり、二階は学生及び一般読書室、地階は郷土室・会議室・書庫・機械室に分れています。

蔵書数は四二、〇八七冊(市民一人当り約〇・七冊)年間登録者は四二〇六人(人口比約七%)、年間貸出冊数四四六三二冊(市民一人当り約〇・七冊)、これがこの図書館のサービスの昭和五十三年の概況です。

図書館運営の重点の一つは、児童奉仕で「すべての子どもに読書の機会を」という標語がありますが、これに沿って、従来から行っている紙芝居・お話し会に加えて、この六月から中央公民館との共催による「子供読書室」を開講しています。ここでは子どもたちが自由に本を手にとって読んだり話合ったり、紙芝居や絵本を読んでもらったりして楽しいひとときをすごしながら本の世界へ慣れ親しむことをめざしています。

また一般奉仕として力を注いでいるのは、読書会活動をより活発なものにすることと、視力障害者へのサービスの強化です。現在行われているボランティアの人々の協力による、著作物の録音サービスの充実させることが課題です。さらに、老齢

のかたがたにも気軽に図書館に来館し、静かに読書を楽しむ憩いの場として利用できるように努める等、地域のあらゆる人々に密着した活動が心がけられています。

飯能市立図書館の最大の課題はこうしたサービスを全域に徹底させることです。飯能市は一三四平方キロメートル余と広域ですので、図書館から遠い地域の七つの公民館を分館として配本していますし、県立川越図書館の移動図書館の巡回もありますが、それらを含め図書館サービスの市全域で均質に受けられるような体制づくりの推進が図られています。

今回「学校図書館と公共図書館の相互協力について」をメインテーマに、小・中学校・高校・公共図書館各々の立場からの問題提起を受けて約50人の参加者による熱心な討議が行われました。

公共図書館における学生・生徒の利用状況と問題点、学校図書館等を資料面で支える公共図書館のあり方等について具体的な要望も出され、また相互協力を進めるための市町村単位の連絡会の経

験も発表されました。さらに各館種から図書館充実のための行財政面の施策強化を訴える声が出ていました



(飯能市立図書館全景)

館種を超えた協力を

埼玉県図書館協会主催の昭和54年度学校・公共図書館研究協議会が8月28日浦和図書館で開催されました。この研究協議会は県内の公共・学校図書館が相互に関わる諸問題の協議を通じて理解を深めあい、県内図書館活動の総合的な発展の方向を探る場として例年行われているものです。

今回は「学校図書館と公共図書館の相互協力について」をメインテーマに、小・中学校・高校・公共図書館各々の立場からの問題提起を受けて約50人の参加者による熱心な討議が行われました。

公共図書館における学生・生徒の利用状況と問題点、学校図書館等を資料面で支える公共図書館のあり方等について具体的な要望も出され、また相互協力を進めるための市町村単位の連絡会の経

験も発表されました。さらに各館種から図書館充実のための行財政面の施策強化を訴える声が出ていました



新刊書を選ぶための情報源

毎年わが国で出版される出版物の点数は非常に数にのぼり、昨年一年間の出版点数は、二万六千余を数えております。このように出版活動の盛んな時代に新刊書の出版情報を私たちに提供してくれる情報源として、どんなものがあるのでしょうか？

まず私たちに一番身近かで手とり早い情報源として毎日家庭に配られてくる日刊紙があります。ほとんどの新聞が毎日のように出版広告に紙面をさいています。新聞の出版広告は、売場からの情報提供とい

紙をつきあわせることによって、選書のための客観的判斷材料を得ることが出来ます。それから、出版ニュース社の「出版ニュース」(月3回)、また書籍販売次店である、日本出版販売

本のひろば

(日版)から出ている「新刊展望」「週刊日版速報」東京出版販売(東販)の「東販週報」も新刊書の情報源として有益です。前記大手取次店で取扱

表紙のことは

「天の園」の舞台は東松山市下唐子に展開する。作者打木村治さんの心の風土でもある。少年期の空と大地と森と水にいだかれ、天地の精気、水の精、旧家の祖霊にあたたくつつまれ育まれたものの集大成が、文部大臣賞に輝く「天の園」である。今も明治の村そのままに、隅川の清い流れが当時の素朴な姿をたたえている。明治の末、作者の母がここにUターンし土着した時、兄から、おまえは自然がいくらきれいでも景色だけでは飯は喰えんよ。するといいえ兄さん、私はこの美しい景色でおなかのくちくなるような子に育てますわ。と。全く大自然は心に晴着を与えてくれることを語っている。

埼玉を舞台とした文学作品は？

- 問 埼玉県を舞台とした明治以降の文学作品を紹介した本にどんなものがありますか。
- 答 県全域にふれたものとしては次のようなものがあります
- 埼玉県文学散歩 榎本了著 出版者は東松山文学散歩の会で昭和39年刊行
 - 埼玉文学探訪 朱棧芸文会編 紅天社 昭和44年
 - 埼玉の文学めぐり 関田史郎著 富士出版 昭和47年
 - 掌編埼玉文学散歩1115 榎本了著 昭和50・52年
 - 文学と風土 武蔵野 桜井正信著 社会思想社 昭和43年
 - 武蔵野 文学風土記 大竹新助著 保育社 昭和40年
 - 埼玉の文学 秋谷豊編 さいたま出版会 昭和54年
 - 大宮文学散歩 秋山喜久夫著 丸岡書店 昭和51年
 - 秩父の文学紀行 斎藤廣一著 養神書院 昭和49年
 - 「田舎教師」と羽生 羽生郷土研究会編 羽生市 昭和51年
 - 「田舎教師」の周辺 宮崎利秀著 きたむさし文化会 昭和49年